様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４６０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０６５

研究課題名（和文）アメリカの大衆音楽と文学の創作におけるソーシャルメディアの役割

研究課題名（英文）The Function of Social Media in the Practice of American Popular Music and Literature

研究代表者
石崎　一樹（ISHIZAKI, Kazuki）

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：７０３３０７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：ソーシャルメディアという、誰もが等しく情報の発信者となることを可能にするテクノロジーの登場以来、文学を始めとする芸術作品の創作と評価をめぐる環境は大きく変化してきた。本研究で理解されたのはインディーロックなどの大衆音楽作品やロックフェスティバルなどの物理空間における文学的想像力の顕在化である。音楽メジャーのマーケティング指標として「インディーロック」が定型化されたことからもわかるのは、音楽メジャーの市場規模におけるこの指標の有効性である。文学と音楽というふたつのジャンル間の相互貫入環境に関する理解は、文学市場の現状分析に一助となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：Since the advent of social media that allow anyone to be an originator of information, the environment for creation and evaluation of artistic products including those of popular music and literature has drastically changed. This study on American popular music—US “indie rock” in particular—has identified the artistic appropriation of literary imagination by musicians (such as The Decemberists and Arcade Fire) which is implied indirectly or manifested directly in their musical products. Those works, in turn, draws attention of audience who have relatively high educational background and intellectual aspiration. Now that the volume of the "indie rock" audience has grown to the extent that major music companies can count on those audience as solid base customers, "Indie Rock" is already a "genre" name that can appeal to the suitable audience. This interdisciplinary study will help contribute to the understanding of present conditions of music and literary market.

研究分野：アメリカの文学・大衆文化

キーワード：教養　翻案　ロックフェス　教育　インディーロック　暗黙知　肉体性　ソーシャルメディア

## １．研究開始当初の背景

(1) James D. Bloom は、1980 年代以降、「文学」や「文学的な」という語彙を「自信を持って使用することが難しくなった」という考え方を示し、この状況を “literary bent” というタームで端的に表現した。2015 年現在、文学を取りまく状況にはまた更に変化が見られ、文学はふたたび「自信を持って」使用できる語彙となった感があり、そしてそれは、本研究が示してきたような、今日の文学の状況をめぐる新たな方法論に関する考察を経ることによって可能になったと考える。当時の、文学が「ブンガク」となった状況下では、作品を鑑賞し批評する行為にも勝る、作品を生産する行為の価値が問われた。このとき現れたのが、過去の文化資本（ピエール・ブルデュー）を活用しながら、「何を読むべきか」ではなく、「なぜ、そしていかに読み、書くべきか」を追求するのは「誰なのか」という問いである。

⑵ 本研究は平成 21 年度と 22 年度に行った「アメリカの大衆文化と教養—『リット・ロック』における文学性の研究」（科学研究費挑戦的萌芽研究）の成果を発展的に追究する側面を持つ。『リット・ロック』研究で理解されたのは、文学テイストに満ちた楽曲を数多く作っている The Decemberists、また Paul Auster や Margaret Atwood らの小説家との協業により作品を制作する One Ring Zero などの音楽家による作品が、若者の知的欲求を満たす「教養主義的」ツールとして存在し、大衆音楽において「教養」が極めて有効に機能している、ということであった。本研究は、創作のより具体的な過程を追求する側面を持つものである。

## ２．研究の目的

⑴ 1 で示した問いは、ソーシャルメディアという情報発信のプラットフォームが存在する今日において、一層重要な問いである。なぜなら、権威的メディアに依存する必要のない創作活動とそれによる社交的行為、また作品の一般への流布が可能ないま、上記の「なぜ、そしていかに読み、書くべきか」という問題意識は、一層の強度で考察される必要があるからである。

加えて、「クロスメディア」、「メディアミックス」といった広告代理店が創りだした概念を持ちますまでもなく、芸術ジャンルの相互貫入はもはやあらゆるジャンルにおいて常に既に発生していた現象であり、本研究で取り扱うポピュラー音楽と文学との関係においても、この現象は看過できない状況として認識できると考える。

以上の状況から、文学を現代の「教養」と見なす場合、この「教養」はいわば拡散した形で存在するが、創作活動を行う作者に創作行為の具体的な方法を聞き、文学の今日的あり方の実際を分析し理論化することで、現代における「創作」の本質を追求するのが本研究の目的である。

⑵本研究が最終的に意図するのは、この成果が現代の文化的社会的状況や情報リテラシーに則した文化研究として、特に教育に関する議論を中心に寄与することである。ひいてはこれが、わが国におけるコンテンツ産業政策立案の一助になればと考えている。

## ３．研究の方法

平成 24 年度から 26 年度までの 3 年間で研究を進めた。研究の核になるのは、作者や研究者へのインタビューで、これを一次資料とした。音楽の実作者に直接話を聴き、創作活動と文学の関わりについて、その意図、方法、手段を調査した。主な対象として想定したのはインディー系のアーティストやインディーズ音楽を主に取り扱う批評家などで、サンプル数が多いため一定の期間を要した。これと並行し、本研究の対象となる作品そのものに対する分析と理論化の作業を平行して進めた。

## ４．研究成果

本研究では「インディーロック」と呼ばれる音楽「ジャンル」についての調査が中心となる。ポピュラー音楽の各ジャンルのなかでも特にこのインディーロックには文学的要素を取り入れるアーティストが多く認められるためである。

平成 24 年度には、研究協力者で、アメリカを中心として海外のインディーズ作品を 200 点近く発表する株式会社サムエコーズの代表取締役、斉藤悠哉氏のコーディネートにより、インディアナ州ブルーミントンに本拠を置くインディーレーベル Jagjaguwar/ Secretly Canadian を訪れ、広報担当、ライセンスなど担当者 4 人に、インディーレーベルにおける作品制作の実際を取材した。このレーベルには、グラミー賞のベストインディーアーティスト受賞者であり、来日時に石崎もインタビュー取材を行った Justin Vernon 氏（ステージ名 Bon Iver[ボン・イヴェール]）をはじめとして、現在のインディーシーンを牽引するアーティストが多数所属しているが、アーティストの芸術的自律性を最大限に尊重するインディーレーベルの、制作やプロモーションに際してのアーティスト本人との関わりなどについての見解を聞いた。

また同ブルーミントンでは、現在インディアナ大学職員である Seth Walker 氏にインタビュー取材を行った。Walker 氏はインディーロックバンド Anathallo の元中心メンバーで、日本の「花咲かじいさん」などをモチー

フにした作品を発表したこともある。アーティストとして実際に活動していた当時の経験や、インディー・アーティストのメンタリティなどについて、実作者としての立場から意見聴取した。

またシカゴでも、同じく Anathallo の元中心メンバーで、現在は企業向けの音楽制作会社を運営する Matthew Joynt 氏にも、楽曲制作の中心人物としての立場から意見を聞いた。Anathallo の作品には芸術的自意識が顕著にうかがえ、それが作品の芸術的自律性に寄与しているものが多いが、Joynt 氏は文学や哲学にも造詣が深いことがわかり、彼の芸術的志向性が作品にもよく現れていることが理解された。

平成 25 年度は、音楽批評家でコミュニケーション学研究者でもある、ユタ州ウェーバー州立大学の Associate Arofessor（当時。現在はミシガン州グランドバレー州立大学）である Eric Harvey 氏に、インディーロック批評家としての立場から意見を聞いた。研究者・教育者として大学で業務に従事する傍ら、音楽批評家として『ローリング・ストーン』、『スピン』、『ヴィレッジ・ヴォイス』など、音楽商業誌やウェブマガジンに記事を多数執筆し続けるという、音楽批評家としてはまれな活動の形態をハーヴェイ氏は維持している。例えばハーヴェイ氏が交流を持つ Vampire Weekend は、コロンビア大学の学生だったメンバー４人が在学中に結成したインディーロック・バンドだが、中心人物は英文科を卒業している。これはインディーロックという「ジャンル」の、文学との近接性を示す一つの証拠でもあるが、インディーロック批評家としてハーヴェイ氏自身、例えば、ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞の可能性についてのコメントをテレビ番組でコメントするなど、文学批評の可能性とも近接する批評活動を行っている。

26 年度にはシアトルの EMP（Experience Music Project）博物館で開催された Pop Conference に参加し、研究発表やワークショップ、セッションなどに参加するとともに、複数の研究者、批評家との意見交換や聞き取り調査などを行った。シアトルはいわゆるグランジ／オルタナティブ・ロック発祥の地とされ、ニルヴァーナをはじめとする有力アーティストが輩出された場所であるという意味で、インディーロックとの関わりも深い。Pop Conference はアメリカでも数少ないポピュラー音楽のみを対象とする学術団体として 2002 年に創設され、国内最大のポピュラー音楽専門学会となっている。

前年にソルトレークシティーでインタビューしたウェーバー州立大学のハーヴェイ氏がパネルを務めたセッション“Reality Bites”、音楽批評家 Carl Wilson 氏参加のセッション“Moved Nonetheless”などに参加し、意見を交換した。また文化批評誌 *Slate Magazine* の Chris Molanphy 氏、同じく音楽批評誌 *Pitchfork* の Lindsay Zoladz 氏らにも話を聞いた。

10 月には、この時点までの活動から理解された事柄から推察し、インディーズ音楽聴取者による文学的価値の外在化行動が顕著に現れる空間がいわゆるロックフェスティバルであるという仮説を立て、テキサス州オースティンで開催された Austin City Limits (ACL)を取材した。アメリカで行われている大規模なロックフェスティバルのなかでも ACL はインディーズ系の出演者が多く、観客へのサンプル取材からも、インディー・アクトへの観衆のコミットの度合いが高い傾向が見受けられた。労働者階級の気分を体現したパンクが出現してからすでに半世紀以上を経た現在においてなおサブカルチャーの一部として認識されているロックではあるが、聴取者世代の年齢が高くなるに伴ってジェントリフィケーションが一定程度完了しているのが現在の状況である。一方、そうしたパンクの系譜にあると考えられているインディーロックは、その聴取者の多くが（アメリカ、日本問わず）大学生を中心とした世代によって占められていて、この種の音楽に関する包括的な研究が、大学教育のあり方についての参照項目を提示しうることは間違いないと思われる。

また当該年度は、インディーアーティストとして長く活動を続けている Sonny Smith 氏や、カナダのトロントを中心に活動する Patrick Fiore 氏（ステージ名 Noble Oak）の東京公演を取材、インタビューした。

スミス氏は、自ら文筆、音楽活動を同時に行い、非常に高い芸術的自律性を維持しつつ音楽活動を行っている。また現在商業的に優勢である EDM(Electric Dance Music)を基本コンセプトとして楽曲を制作しているフィオーレ氏は 23 歳と若く、ソーシャルメディアを有効活用している世代のアーティストとして意見を聴くことができた。

こうしたフィールド調査などと並行し、インディーロックを商業音楽の対立軸として、または同一の文脈のなかで論じるための前提とするための研究として、商業的に主流とされるポピュラー音楽についての研究も進めた。この一環としては、1970 年代に英米の社会／文化に大きな影響を与えたロックバンドであるレッド・ツェッペリンの代表作『４』について、フィリップ・K・ディック論も手がけるエリック・デイヴィス氏が論じた対抗文化批評を邦訳した。本書は音楽・文化批評では定評のある米コンティニューム社の『33 1/3』シリーズから出版されているが、これに加え、同シリーズから出版された、ロックの歴史では最重要ともいえるバンド、ビートルズの『レット・イット・ビー』論についても邦訳を行った。

研究発表の機会としては、JACET 文学教育研究会で『ポピュラー音楽と文学の接合点について』というテーマで講演し、ポピュラー音楽のなかの文学性について、アメリカのインディーロックの例を中心に成果を発表した。また、英語狂言などで活躍中の若手狂言師である茂山童司氏がパーソナリティを務めるラジオ番組（ABC ラジオ『おとぎの暇』）にゲスト出演し、『レッド・ツェッペリン４』などの話題を中心に、音楽と文学の関係についても言及、成果の一部を紹介した。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 石崎一樹、ロックが幸福だった時代の最後のアルバム『レット・イット・ビー』、図書新聞（査読無し）、No.3122、2013、8

② 石崎一樹、作家とクロスメディア――デイヴ・エガーズの活動を中心に、比較文化研究（査読有り）、No.100、2012、63-75

〔学会発表〕（計１件）

① 石崎一樹、ポピュラー音楽と文学の接合点について（講演）、JACET 文学教育研究会、2014 年 2 月 22 日、同志社大学今出川キャンパス（京都市上京区）

〔図書〕（計 3 件）

① 石崎一樹、Some Echoes、シーズ・オール・ノウズ・オール対訳、2014、12

② 石崎一樹、水声社、レット・イット・ビー（シリーズ ロックの名盤!) 2013、189

③ 石崎一樹、水声社、レッド・ツェッペリン IV（シリーズ ロックの名盤!）2012、229

## ６．研究組織

(1)研究代表者

石崎一樹（ISHIZAKI, Kazuki）
奈良大学・教養部・教授
研究者番号：70330751

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

斉藤悠哉（SAITO, Yuya）
Some Echoes(株)代表取締役